

インターネットピープルに贈る

発売直前!

Windows95の ネットワーク 機能チェック



全米では話題沸騰、CNNなどのニュース番組でもその加熱ぶりが報道され、社会現象にまでなってしまったウィンドウズの新しいバージョン『ウィンドウズ95』。我が国でもマイクロソフトの公約の日『米国の発売から3か月以内に日本版を出荷する』が迫ってきた。もちろんインテルのCPUを搭載したマシンを使っている多く人はウィンドウズ95にアップグレードすることを考えざるを得なくなり、不安に思っている人もいるだろうし、すでにその評判を聞きつけて発売日までじっと待ってられない人もいるだろう。それにOS/2やマッキントッシュのユーザーも、今回ばかりは他人ごとというよりは、かなり気になる存在なのではないだろうか？

『いったいマイクロソフトは私たちにどのようなパソコン環境を提示してくれるのだろうか?』

一般的なウィンドウズ95の情報は多くのパソコン雑誌でも十分に読めると思うので、この特集ではインターネットマガジンらしく、インターネットピープルにとってのウィンドウズ95はどのように見えるのかについて、その機能をチェックしてみよう。

執筆 佐藤和彦(パート1) 塩田紳二(パート2 / パート3)
インターネットマガジン編集部編



Windows95 & NetWork

パート1: ウィンドウズ95の

ウィンドウズ95のみどころは数々あるが、インターネットマガジンの読者にとってはGUIの変更などどうでもいいに違いない。ネットワークとの親和性はどのようになっているのかという点に着目して、ウィンドウズ95のみどころを解説することにしよう。



ウィンドウズ95のみどころ (1)

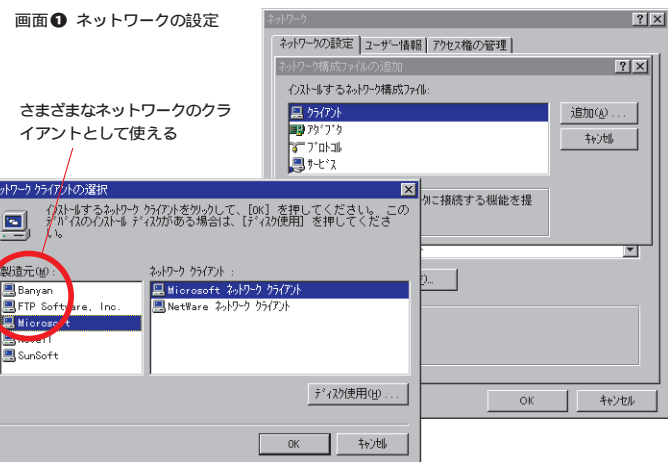
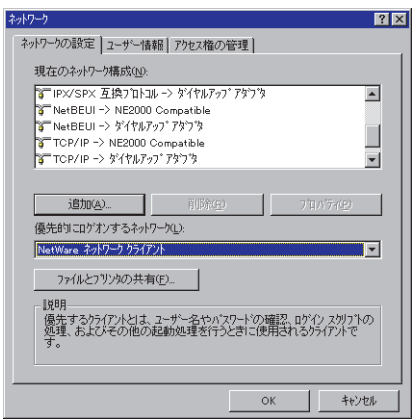
「インターネット／ネットワーク接続ソフトがいらぬい」

ウィンドウズ95は、ネットワークに接続するために必要な機能を標準装備したOSだ。従来は別途購入したソフトウェアを追加することによって拡張していた機能が、最初から含まれている。イーサネットなどでLANを構築したり既存のLANに接続したりする場合に必要な機能の多くが標準装備なので、いままでのようにネットワークへの接続のためのソフトウェアを別途購入する必要がない。ウィンドウズNTやノベル社のネットワークウェアのサーバーに接続する機能だけでなく、ピアツーピアでファイルやプリンターを共有する機能も組み込まれているため、小規模なLANが手軽に構築できる。

ネットワーク機能を内包する
いままでのDOSやウィンドウズには、ネットワークに接続するために必要な機能が含まれていなかった。イーサネットにしるダイヤルアップにしる、ネットワークに接続したいと思ったら、DOSやウィンドウズに必要な機能を追加するために、別のソフトウェアを購入してインストールしなければならなかった。ネットワークの管理が本業でない人にとっては、これだけでも大きな負担だ。
ウィンドウズ95なら、これらの問題の多くが、単にOSを入れ換えるだけで解決する。まず、ネットワークに接続するのに必要な機能は、ほとんどがウィンドウズ95の標準機能として組み込まれているので、ウィンドウズ95

のパッケージを用意するだけで、LANでもダイヤルアップでも簡単に接続できるのである。様々なネットワークインターフェイスカード(NIC)のためのドライバーが用意されているだけでなく、後で述べるように、システムに取りつけられたNICを自動的に検出し、可能なら適切な設定に変える機能もあり、もちろんドライバーも自動的に組み込まれる。従来のように、自分でCONFIG.SYSファイルに手を加えたり、ドライバーの組み合わせやロードする順番で悩むことはなくなるのである。

ウィンドウズNTはもちろんネットワークウェアサーバーとも接続可能
サーバーとの接続に関しても、LANマネージャーやウィンドウズNTだけでなく、ネットワークウェアなどサードパーティのメジャーな製品もサポートされている。例として、ネットワークウェアの既存のLANに接続されたパソコンのOSを、DOSやウィンドウズ3.1からウィンドウズ95に入れ換える場合について考えてみよう。ネットワークウェアのクライアントとして必要なドライバー類もすべてウィンドウズ95の配布ディス



画面② ネットワークコンピュータのフォルダを開いたところ。ネットワーク内にあるコンピュータがリストされる

みどころ

クに入っているので、簡単な操作でネットワークのサーバーにアクセスする機能を組み込める。また、同じイーサネット上にウィンドウズNTのサーバーも接続されているなら、ドライバを追加するだけでクライアントになれる。

このとき、ネットワークのドライバを外したり、設定を切り替えたりする必要はない。ネットワークとウィンドウズNTというプロトコルの異なるサーバーに、同時にアクセスできるようになるのである。もちろん、TCP/IPも並行して利用できるし、ウィンドウズ95同士のピアツーピアのファイル共有も、同じイーサネットの上に共存できる。ウィンドウズ95は、複数のプロトコルを同時に扱えるのだ(画面① / 画面②)。

ダイアルアップ接続に対応

インターネットサービスプロバイダーやウィンドウズNTサーバーにダイアルアップで接続する機能も標準装備になった。複数のプロバイダーやサーバーに対する設定を保存しておいて、必要に応じて呼び出せる。従来は、ダイアルアップ接続に使用する製品ごとに設定

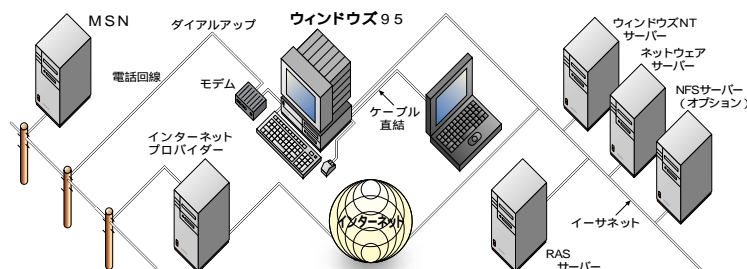
や操作が違っていたが、ウィンドウズ95ではOSの機能として組み込まれているので、一貫したユーザーインターフェイスで操作できる(画面③)。

プロバイダーやサーバーの電話番号やプロトコルを一度設定しておけば、あとは簡単な操作でダイアルアップ接続を指示できる。「ダイアルアップ接続」のフォルダーを開いてアイコンをダブルクリックすると、そのプロバイダーやサーバーに接続するための専用のダイアログボックスが開き、接続ボタンをクリックすれば接続操作が始まる(画面④)。

TELNET、FTP、PINGといったネットワークの基本的なユーティリティも含まれ、TCP/IPによるインターネット接続の設定と基本的な機能はすべてウィンドウズ95のパッケージに入っていると書いていよう。WWWブラウザやニュースリーダは含まれていないが(マイクロソフトプラスにはWWWブラウザが含まれている)これらはフリーウェアやシェアウェアをFTPで入手できるので、ウィンドウズ95のパッケージだけでもインターネットを本格的に利用できるはずだ。

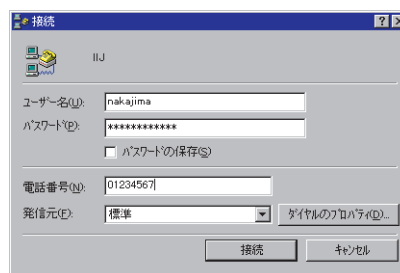
日本のネットワーク普及を促進するか!?

このようにウィンドウズ95は、ネットワーク機能を標準装備したパーソナルOSとして、大きな可能性を秘めた製品だ。実は、これらの機能の一部は、ウィンドウズフォークグループというウィンドウズ3.11のネットワーク機能付きバージョンにも含まれていたのだが、このバージョンのウィンドウズは日本向けにローカライズされなかったため、日本のほとんどの人は恩恵に浴することができなかった。そのため、ウィンドウズ95のネットワーク機能は、日本ではより一層強烈なインパクトがある。ウィンドウズ3.1からの移行が進めば、いままでネットワークに消極的だった企業でも、ネットワーク化が加速度的に進むだろう。なにしろ、本格的なネットワーク機能が、タダで付いてくるのである。使わなければ損だ。



ウィンドウズ95が提供するネットワーク環境のイメージ

画面① ダイアルアップ接続の設定。各種の設定もウィザード形式で答えることですぐに設定完了。



画面④ ダイアルアップ接続のダイアログボックス



ウィンドウズ95のみどころ (2)

「プラグアンドプレイでハードウェアの追加もカンタン」

ウィンドウズ95は、プラグアンドプレイをサポートしたOSである。システムのハードウェア構成を、ハードウェアウィザードというソフトウェアが自動的に判断し、必要に応じて設定を変えたり、ドライバーを組み込んだりしてくれる。この機能は、ビデオカードやディスクインターフェイスだけでなく、ネットワークインターフェイスやモデムもカバーしており、カードやドライバーの面倒な設定から解放されるのである。

難しかったハードの設定をウィンドウズが肩代わりしてくれる

ネットワークインターフェイスカード (NIC) やモデム、ドライバーやプロトコルスタックの設定は、従来はマニュアルを見ながら悪戦苦闘するものだった。NICに並んだディップスイッチをシステム構成に合わせて設定し、適切なドライバーを適切な順序で組み込む。ダイ

アルアップでIP接続する場合でも、モデムの型番と初期化文字列を設定するなど、ハードウェア関連の設定は慣れない人にとっては簡単な作業ではない。多くの場合、ネットワーク接続ソフトウェアなどのインストールプログラムは、それなりに賢く、それなりに親切で、よくできたものなら待っているだけでいいのだが、必ずしもすべてのパッケージに完璧なインストーラーが付いているわけではないし、NICやモデムとソフトウェアを別々に購入した場合は、自分で考えて設定しなければならぬ場合も多い。

ネットワークカードは、割り込みやI/Oポートといったハードウェア資源を使うので、この設定を誤るとシステムが起動しなくなる場合さえある。また、モデムを適切に初期化するコマンドをマニュアルから拾い出すのは、専門用語に慣れない人にとっては非常に難しい。これらの面倒な作業は、できれば誰かにお願

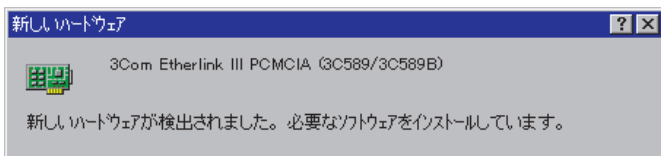
いしたいと思う人が少なくないのもうなずける。

システム構成を判断して適切な設定をするのに必要なのは、まず拡張スロットやインターフェイスに接続されている製品が何かを判断する能力と、その製品に合ったドライバーや他のソフトウェアの設定の組み合わせの知識だ。この2つを与えてやれば、融通の効かないコンピュータでも設定できる。

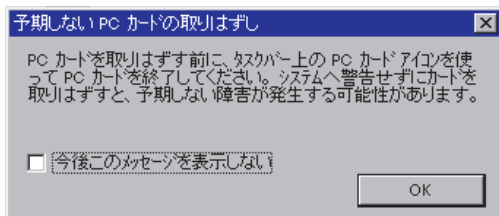
ウィンドウズ95のハードウェアウィザードは、まさにこのために作られたソフトウェアだ。システム構成を自分で調べて、適切な設定を判断し、必要ならハードウェアの設定を変更して必要なドライバーやプロトコルスタックをシステムに組み込む機能を持っている。もちろん万能ではなく、ハードウェアによっては設定を自動的に変更できないし (ジャンプスイッチやディップスイッチを切り替えられなくても責めるわけにはいかない) 自分が知らないハードウェアに対してはなすすべがない。

メジャー商品を使わないと結局は難しい

だが、ウィンドウズ95やプラグアンドプレイを意識して設計された最近の拡張カード類なら、ソフトウェアの操作で設定を変更できるようになっている。また、ウィンドウズ95のハードウェアウィザードには、非常に多くの拡張カードや周辺機器が登録されている (画



画面① 新たなハードウェア (この場合はPCカードのイーサネットカード) を挿入すると、自動的に認識して、ドライバーソフトウェアのインストールが始まる。



画面② 挿入されているPCカードを抜くと、抜いたことを認識するアラームが出る。



写真① プラグアンドプレイ対応のPCカードタイプのイーサネットカードを入れる。すでに入れたことのある種類のカードならダイアログボックスが表示され、即利用可能。使ったことのないカードならドライバーのインストールが始まる。

面③)。そのため多くのハードウェアは自動的に検出されてドライバーが組み込まれるので、ほとんどの場合、ハードウェアウィザードにオマカセして見ているだけで片付く(ただし、既存のNICの中には、ジャンパーレスでもハードウェアウィザードが設定を変えられず、NICに添付されたユーティリティで適当に設定してからハードウェアウィザードにお願いしなければならぬものもある)。

ネットワークカードの自動検出は、ウィンドウズ95が所定のI/Oポートにアクセスしてみたり、割り込みを発生させたりしてチェックすると思われるが、モデムの検出のほうは、もう少し簡単だ。「AT13」などのモデムに関する情報を返すATコマンド送って、返ってくる文字列を調べればよいのである。これでモデムの型番がわかれば、あとはその製品に合った初期化文字列や最大速度を調べて設定するだけだ。ウィンドウズ95のハードウェアウィザードは、さまざまなNICやモデムに関するデータを持っていて、このデータを調べながら、システムの細かい設定をする。

当然、ウィンドウズ95が持っている情報では、ウィンドウズ95の出荷後に発売される新しいハードウェアに対応できないが、これは従来の拡張カードにドライバーディスクが添付されていたように、ウィンドウズ95用の設定情報などのデータを収めたディスクを添付す

ることで解決する。こうなると完全にオマカセではないが(フロッピーをドライブに入れてやるぐらいは手伝ってもらいたいだろう)、カードの設定やドライバーの組み込みなど、面倒な作業のほとんどは自動化される。また、プラグアンドプレイ対応でない装置でも、システムのハードウェア構成と割り込みなどの割り当て状況を表示するデバイスマネージャーで得られる情報を利用すれば、適切な設定を見つけれられる。これもメリットのひとつだ(画面④)。

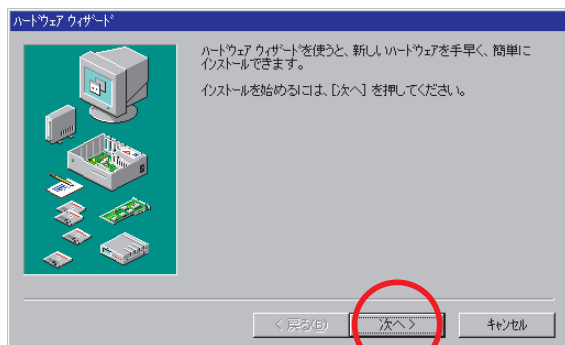
マイクロソフトは、「PC95」というハードウェアの規格を作り、この中でプラグアンドプレイに対応するためのハードウェアの条件を細かく規定している。これに合わせて作ったハードウェアなら、ウィンドウズ95のプラグアンドプレイの機能が最大限に利用できる、つまり作業は最小限になる。逆に、プラグアンドプレイを意識しないで作ったカードだと、ハードウェアウィザードの恩恵は受けられず、「設定に問題があるから解決しろ」と言われてしまう場合もある。

抜き差し可能なPCカードスロット

拡張スロットやシリアルインターフェイスだけでなく、(現状でもかなりプラグアンドプレイになっている)PCカードスロットや携帯パソコン用のドッキングステーションも、ウィン

ドウズ95のプラグアンドプレイ機能のサポート対象だ(写真①)。これらの機器は、電源を入れたままで着脱されることもあるわけで、ネットワーク上のリモートドライブにしるPCカードのハードディスクにしる、ドライブ構成が動的に変わることになる。ウィンドウズ95には、このような状況を検出して対応する機能があり、必要に応じてデバイスドライバーを動的にロードやアンロードする機能も持っている(画面①②)。

ハードウェアを追加したときのシステムの設定や変更は、経験を積んだ人でも面倒なものだが、ウィンドウズ95のようにプラグアンドプレイの機能が組み込まれたOSなら、負担は非常に軽くなる。現状では、既存のハードウェアの中には完全なプラグアンドプレイ対応でないものもあるもので、ユーザーが泣かなければならないことも少なくないが、今後プラグアンドプレイ対応の製品が増えるにつれて、ハードウェアで悩むことはなくなっていこう。経験を積んだ人にとっては、周りから感心されたりほめられたりするチャンスが減ってしまうのは残念だが、面倒なことに巻き込まれる機会も確実に減るはずだ。



画面③ ハードウェアウィザード。簡単な質問に答えるだけで、あとはソフトウェアでハードを発見し、設定してくれる。

このボタンを押すだけでOK!



画面④ デバイスマネージャーのダイアログボックス。接続(内蔵)されているハードウェアの設定を変更することができる。



ウィンドウズ95のみどころ (3)

「ウィンドウズNTサーバーと電話回線でファイル共有できる」

ネットワークに接続するための機能が標準装備のウィンドウズ95には、離れたところにあるネットワークに電話回線などを經由して接続する機能、リモートアクセスの機能も持っている。自宅や出先から会社のサーバーにアクセスし、電子メールを読んだり最新データを取り寄せたり、転送速度は回線次第だが、イーサネットやLANに接続しているときと同じように利用できる。

リモートアクセスがカンタンに実現

電話回線を経由して、離れたところにあるコンピュータにアクセスするというのは、本誌の読者であれば、ぜひ試してみたい操作だろう。こうした操作を一般に「リモートアクセス」といっている。このリモートアクセスは、大きく分けると2つのパターンがある。

1つは、パソコン通信の「ダウンロード」やインターネットの「ftp」のように、サーバー中にあるねらいを定めた特定のファイルを転送することを目的としたものだ。

もう1つは、サーバーマシンのファイルシステムが手元のマシンのファイルシステムの一部（たとえばG：ドライブ）に見えるものだ。フ

イルシステムばかりではなく、LANで共有しているプリンターやモデムも含め、会社内のLANの中にあるハブにパソコンを接続したかのような状況を電話回線を使って作り出すものである。

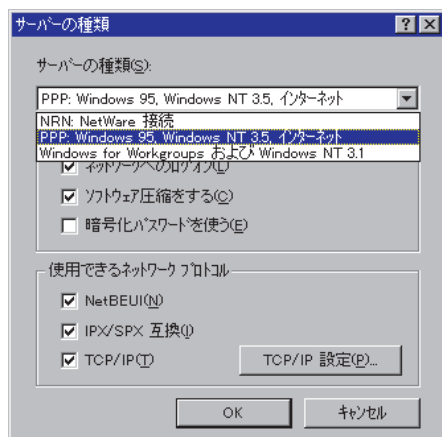
一般にインターネットサービスプロバイダーにPPP接続をして使うという形態では、前者のような使い方をすることが多いだろう。しかし、幸いなことに会社にリモートアクセス可能なノードを用意できるのであれば、ぜひ後者のパターンを試してみることをお勧めしたい。ネットワークでサーバーにアクセスするというのは、ファイル転送だけではなく、実にいろいろな可能性があるということを実感することができる。日本、いや世界のどこにいても、自分のパソコンが会社のネットワークにつながっているのと同じ状況を作り出すことができ、しかも何の設定も変更することなしに、プリンタなどの資源を使うことができるわけだ。

ウィンドウズ95では、ウィンドウズNTをサーバーとした組み合わせで（ウィンドウズ95でも「マイクロソフトプラス！」が入っていれば）、こうしたリモートアクセスの環境を作

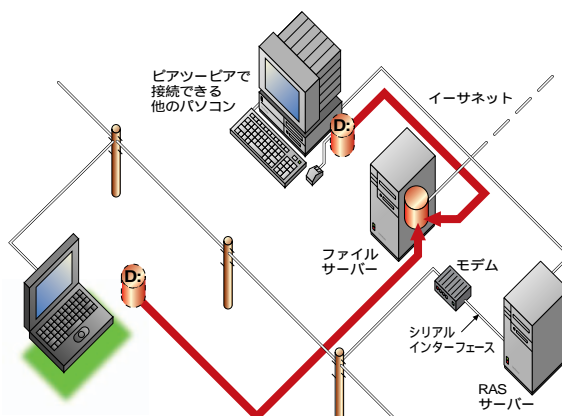
ることができる。もちろん、こうしたサービスを提供するのに必要なセキュリティ機能も用意されている。ファイル操作など、使い勝手は回線の速度に左右されるが、それでもftpやパソコン通信のようなファイル転送だけのネットワークと比べると、リモートドライブとして利用できるメリットは大きい。SMTPやPOP3に対応していない、ファイルの共有機能を利用した電子メールシステムも利用できる。もちろん、そのネットワークがインターネットに接続されていれば、インターネットサービスプロバイダーのように、インターネットへの窓口としても利用できる。

会社のマシンがインターネットに接続されていれば、外からtelnetもできるしftpもできるわけだが、LANの資源がそのまま見えてしまうリモートアクセスに比べると、不自由を感じることが否定できない。高速な回線で接続できれば、転送するデータ量の少ない作業なら、リモートアクセスを意識しないで使えるだろう。自宅勤務の可能性も一層広がるし、モバイルユーザーが会社に戻る頻度も少なくなる。

この機能を標準装備した環境が、広く普及したウィンドウズ3.1の後継として出てくるのだから、電話回線だけでなく、通勤電車の乗車率など、世の中に与える影響も少なくないのではないだろうか。リモートアクセスは、人間の物理的な移動を減らして、情報の移動を加速する機能でもある。



画面① ダイアルアップ接続の相手のサーバーの種類を選択しているところ。ウィンドウズNTのRASサーバーを使うとインターネットサービスプロバイダーとはまた違った使い勝手があり、ネットワークの可能性をさらに感じる





ウィンドウズ95のみどころ(4)

「モバイルユーザーは ブリーフケースに注目」

ウィンドウズ95には「ブリーフケース」という新しい機能がある。デスクトップのノートパソコンを使い分け、とくにファイルを持ち出して出先で更新し、それを会社のデスクトップに戻して操作するといった使い方をすると役に立つ便利な書類カバンだ。使い方は簡単だが、モバイルコンピューティングにかかせない機能である。

モバイルユーザーの悩みを解決

ノート、サブノートパソコンはすでにウィンドウズマシンとして十分な処理性能をもっている。デスクトップパソコンに近い環境を持ち歩き、デスクトップと同じように使っている人も多い。当然、利用するアプリケーションも同じなら扱うデータファイルも同じ。出先で入力したデータをデスクトップにコピーしたり、会社で作った文書を持って客先に出向いたり、デスクトップとノート間のファイル転送は日常的な作業になる。そこで問題になるのが、ファイルのバージョン管理だ。

バージョン管理とはいっても、ここでは単に扱うファイルを常に最新バージョンに保つという程度で、更新履歴の管理などの高度な機

能は考えない。要するに、ノートパソコンのディスクに入っているファイルと会社にあるファイルのバージョンを一致させ、できる限り新しいバージョンが利用できる仕掛けである。

ノートパソコンとデスクトップやサーバーがネットワークで常に接続されているなら、ファイルの共有機能を利用すればいいので、最新バージョンがどれかを意識する必要はない。しかし、移動するときネットワークから切り離されてしまうノートパソコンでは、そうはいかない。

出かけるときに最新版をノートパソコンのディスクにコピーすれば、少なくとも出かける時点での最新版を持って歩くことはできるわけだが、このファイルを出先で更新すると、最新バージョンは会社ではなくノートパソコンに入っているようになる。会社に戻ってきたら、このファイルをデスクトップやサーバーにコピーして、会社のファイルも最新バージョンに揃えなければならない。扱うファイルが1つか2つならたいした手間ではないが、あちこちのディレクトリに分散した複数のファイルを、間違いなく最新バージョンに保つのは面倒だ。バッチファイルを作っておいてコピーすればす

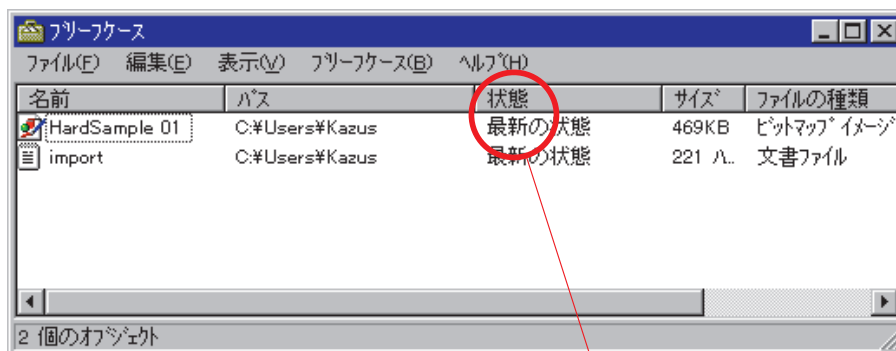
む場合もないではないが、次のように、ただ無条件にコピーするのは危ない場合もある。

たとえば、自分が外でファイルを更新している間に、会社では同僚が同じファイルに別のデータを入力しているかもしれない。ネットワークでファイルを共有している場合は、とくに注意が必要だ。ネットワークOSには、複数の人が1つのファイルを同時にオープンするときに制限をもうける機能などがあるが、ネットワークから切り離されて移動しているノートパソコンに関してはなすすべがない。なにしろ、元はサーバーのディスクにあったファイルでも、それをノートパソコンのディスクにコピーして持っていくのだから、ネットワークから見れば、コピーした時点で既に別のファイルになっている。これを出先で更新しようが削除しようが、切り離されたノートパソコンの上でやることには手が出せない。

しかし、ユーザーから見ると、出先で新しいデータを入力した瞬間に、そのファイルの最新バージョンは、そのノートパソコン上のファイルになる。デスクトップやサーバー上のファイルは、古いデータのバックアップでしかない。会社に戻ったところでノートパソコンの新しいファイルをデスクトップやサーバーにコピーしてバージョンを一致させるわけだが、そのときデスクトップやサーバーの古いはずのファイルが更新されて「もう1つの最新バージョン」になっていた場合は、それを検出して警告する機能が必要だ(画面①)。

ブリーフケースのアイデアは秀逸

ウィンドウズ95のブリーフケースは、これ



画面① ブリーフケースのウィンドウ。ファイルをウィンドウにドロップしておくだけで、元のファイルとの整合をチェックする

どちらかの状態が変化するとこの項目で知らせる

らの機能を、簡単な操作で扱えるソフトウェアにまとめたものだ。常に最新バージョンであることを保証したいファイルをドラッグ&ドロップしておけば、どれが最新のファイルかを調べて、ノートパソコンとデスクトップやサーバーのファイルのバージョンを揃えてくれるアプリケーションだ。前に述べた同じファイルを2人が同時に更新してしまった場合は、それを検出し警告してくれる。ディレクトリ全体を管理対象とすることもできる。もちろん、一旦フリーケースでバージョンの同期を管理するように設定したファイルを元のファイルから切り離して、独立したバージョンとして扱える。

プログラムの仕掛けはそれほど高度なものではないようだし、人間が手作業で操作してもなんとかなる作業ではあるが、タイムスタンプの比較のようにコンピュータのほうが速くて正確に判断できることなら、パソコンにやらせるほうがいい。もちろん、人間よりは間違いも少ないので、古いファイルを最新版にコピーしてその日の成果が消えてしまう危険も、ず

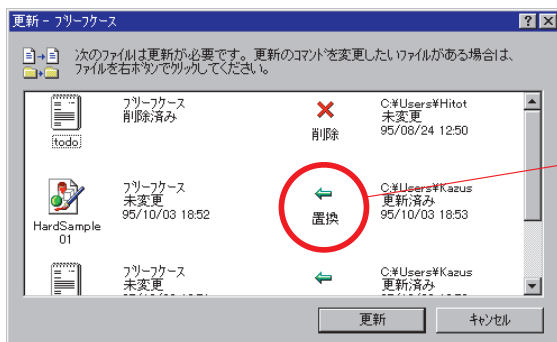
っと少ない。

このようにウィンドウズ95のフリーケースは、この機能だけを切り離して見ただけでも、モバイルユーザーにとっては便利な機能だが、これをウィンドウズ95の他の機能、標準装備のネットワーク機能やケーブル接続（2台のパソコンをシリアルケーブルで直結し、ネットワークのようにファイルなどを共有する機能）と組み合わせて考えると、さらに効果的な使い方が見えてくる。出先からダイヤルアップで会社のマシンに接続して、手元のノートパソコンのファイルと会社のファイルを最新版に揃えることもできるし、ネットワークのない、デスクトップ1台 + ノートパソコン1台という組み合わせでも、ケーブル接続で手軽にフリーケースが使える。また、両方もも更新されていたときに、警告を発するだけでなく、適切なアプリケーションを起動してユーザーがファイルを編集できるようにする機能もある。

このようなファイルのバージョンの同期の問題は、1人で仕事をしていても2台のパソコンを使うなら注意しなければならないことだが、

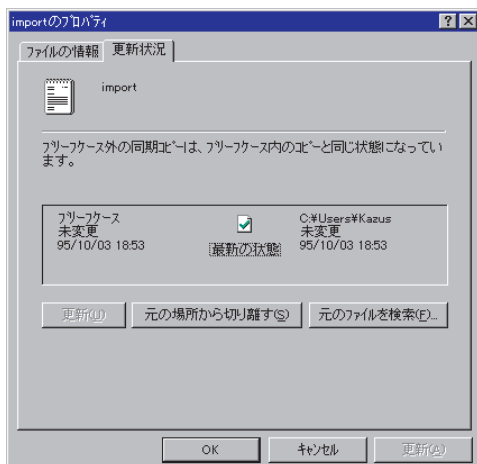
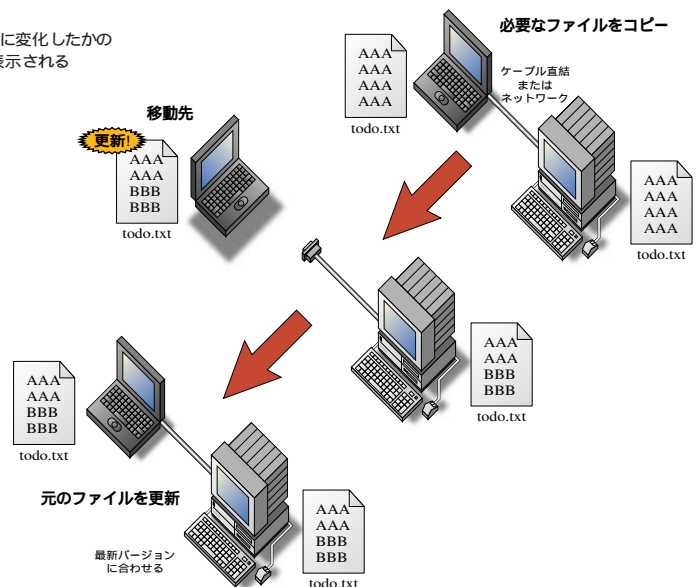
何人かのグループで仕事をするときは、ちゃんと考えておかないと困ったことになる可能性が高い。ウィンドウズ95のフリーケースは、見かけはシンプルなユーティリティだが、これを使えば複数のマシンに分散したファイルのバージョン管理を自動化できるプログラムだ。デスクトップパソコンとノートパソコンを併用しているなら、見逃せない機能のひとつだ。

また、ウィンドウズ95には、ノートパソコンなどの携帯パソコンをドッキングステーション（拡張ボックス）と組み合わせて使うことを考慮した機能もある。これはすでに述べたプラグアンドプレイにも関係してくるが、電源を切らずに接続したり切り離したりする操作（ホットドッキング）を意識した機能で、ディスクやネットワークドライブの状態の変化に自動的に対応できる。PCカードの管理やパワーマネージメントも、当然ウィンドウズ95の標準機能の一部だ。モバイルコンピューティングの視点でも、ウィンドウズ95は実に魅力的な環境なのである。



画面② フリーケースの画面

どのように変化したかの詳細が表示される



画面③ フリーケースでファイルのプロパティを表示させたところ



ウィンドウズ95のみどころ (5)

「電子メールやファクシミリなどが エクステンジで統合される」

ウィンドウズ95には、電子メールやFAXといった通信手段を統合し、パソコンの情報通信機器としての使い勝手を向上させる工夫が盛り込まれている。テキストとして作成したメッセージを、電子メールでもファクシミリでも同じように送信できるサービスは現在でもパソコン通信などで提供されているが、ウィンドウズ95に標準装備されるのは、もっと強力で柔軟な機能だ。電子メールとFAXだけでなく、アドレス帳管理や文書データベースなどを統合した環境を実現する、オフィスの情報化の次のステップと言ってもいいだろう。

ウィンドウズ上で作成したドキュメント をメールやFAXで送る

ウィンドウズは、テキストとグラフやビットマップなどのイメージが混在する文書を扱える環境で、ビジネスアプリケーションの多くが文字情報とグラフ、画像などが混在するデータを扱える。グラフや画像がなくても、文字修飾などの書式データを含んだワープロの文書でさえ、バイナリファイルである。このようなテキスト以外の、バイナリデータの混じった情報を日常的に扱える環境になったにも

かわらず、それを電子メールで手軽に送れるとは限らない。バイナリメールが扱えるパソコン通信なら、その中のローカルなメールなら送れないことはないが、それでもサイズに制約があったり、テキストだけのメールとは違った手順を踏まなければならない。インターネットのメールのように純粋なテキストしか送れない場合には、適当な形式でエンコードしてテキスト化して送らなければならない。データをまとめて文書を作るのは簡単でも、それを誰かに送ろうと思うと、簡単に片づかないこともある。

「エクステンジ」を使うと、誰に何を送るかさえ指定すれば、グラフや画像が混在する文書でも、簡単な一貫した操作で送れる。MIMEのように既存のメールシステムに対する拡張もひとつの手段だが、その拡張された機能を「ユーザーにどう見せるか」というところまで考えて作られたのが「エクステンジ」だ。

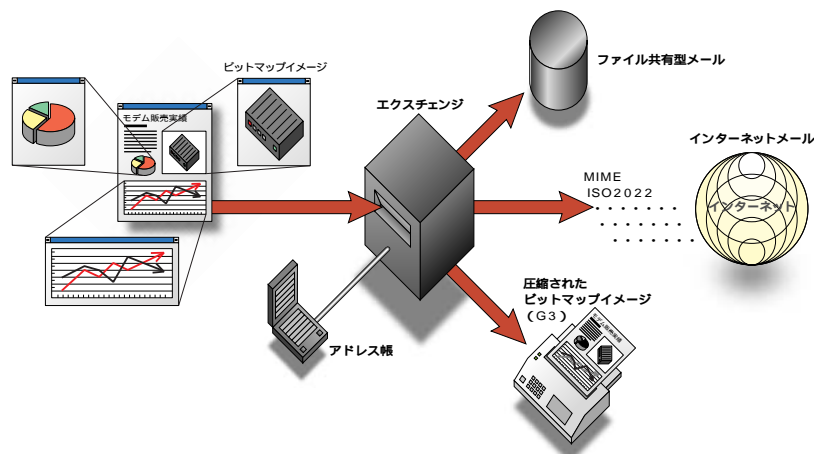
また、情報をどうやって送るか、何で送るかも、「エクステンジ」に任せることができる。たとえば、電子メールとファクシミリの違いである。

電子メールとファクシミリは、元になる文書は同じでも、相手に届くモノは、まったく違う。電子メールは文字コードで表現されたテキストで、テキストとして送ったものをテキストとして受け取る。ファクシミリでは、まず送る側で文書をビットマップイメージに変換し、それを相手に送る。受け取る側に届くのもビットマップイメージだ。どちらもモデムでやり取りできるが、転送するデータの形は異なるメディアということになる。

「エクステンジ」は、この2つのメディアを統合し、共通の操作系を提供する環境と考えるとわかりやすい。テキストとイメージを組み合わせた文書を送るとき、電子メールならリッチテキストやバイナリデータ（必要に応じてMIMEでエンコードされる）のストリームとして、ファクシミリなら印刷するときと同様にイメージに変換して送られる。同じように、インターネットの電子メールを扱えるゲートウェイがあれば、「マイクロソフトメール」がインターネットメールかを意識しないで扱えるようになる。

グループウェアの機能も持つ

さらに、「エクステンジ」は、ユーザー間で情報を共有する機能も提供している。これは、電子メールを開いて読むのと同じように、共有する文書を読んだり、情報を追加したりする機能で、電子メールで収集した情報だけでなく、データベースサーバーから情報を得ることもできる。「ロータス・ノーツ」の文書データベースの機能を知っていれば話は早いですが、要するに数人のグループから全社的な規模ま



ウィンドウズ上で作成されたドキュメントは、たくさんのフォントが使っていたり、表やグラフが貼ってあったり、図が書き込まれていたり格段と表現力が向上している。これを「通信」で他の人に送る場合、大きく分けると3つの方法がある。1つはファイルを共有する方法（cc:Mailのようなファイル共有型のメールもこの方法に含まれる）そしてインターネットのメールのようにファイルの実体を送る方法、そして完成したイメージをファクシミリで送る方法だ。しかし、この3つの方法はそれぞれ送り方（プロトコル）が異なる。そのため送る手順も異なる。エクステンジは同じ手順でいずれの方法でもデータを送ったり、受け取ったりすることができる統合された環境を提供する。それに加え、送り先の電子メールアドレスやファクシミリ番号を管理するアドレス帳も付属している。

でのさまざまな規模で利用できる、必要に応じて情報を即座に引き出せるサービスだ。電子メールによる外部・内部とのやり取りで刻々と更新される情報を、いたるところから参照できるようになっていけば、様々な業務の情報の流れを効率化し、必要に応じて素早い対応が可能になる。また、スケジュール管理機能と電子メールの組み合わせによって、会議の通知や会議室の予約など、企業の内外の連絡を効率化する機能も提供する。

MAPIの上に統合された環境

このように電子メールとファクシミリを統合し情報の交換と共有を支援するツールである「エクステンジ」は、基本的にはウィンドウズ95などで走るクライアントとウィンドウズNTサーバーで実行されるサーバーを組み合わせたクライアント・サーバー・アーキテクチャで構成される。ウィンドウズ95に標準で添付されているのは、このクライアントの部分だ。サーバー側はウィンドウズNTの「バックオフィス」の一部で、「マイクロソフトメール」の後継となる。ウィンドウズだけでなくマッキントッシュ用のクライアントも用意される予定だ。

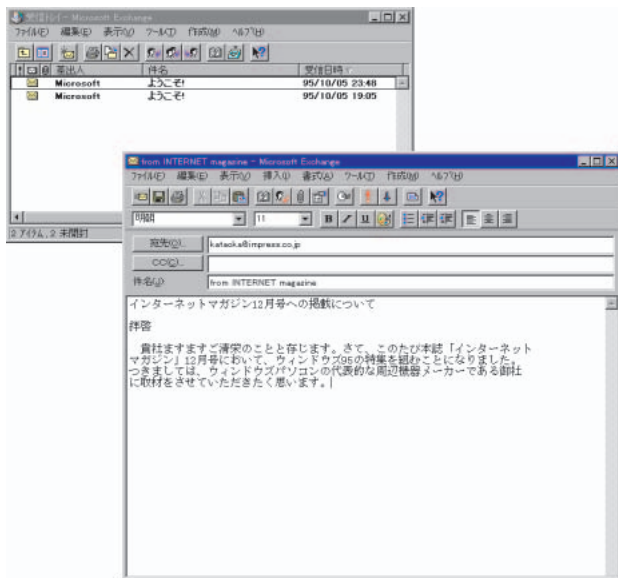
「エクステンジ」のクライアントは、MAPIというAPIを通して外部にアクセスする。MAPIはメッセージサービスを扱うAPIで、この下には「マイクロソフトメール」のサーバーにアクセスする、あるいはFAXモデムを使って送信するといった機能を組み込んだモジュールがある。このモジュールは必要に応じて追加できるので、新しいメディアにも柔軟に対応できる。ウィンドウズ95に入っているエクステンジの相手をしてくれるエクステンジサーバーは、まだ存在しないが、「マイクロソフトメール」やFAXなど既存のサーバーや装置も利用できる。この「エクステンジ」サーバーの登場をまたなくても、ウィンドウズ95のリリースと同時に、「エクステンジ」の機能を体験できるというわけだ。

また、「エクステンジ」はウィンドウズ95の環境、とくにアプリケーション間の連携の機能、つまりOLEを利用できるので、「エクセル」や「ワード」など他のアプリケーションのデータや表示を電子メールやファクシミリの文書に張り込むこともできる。インターネットの電子メールのようにバイナリデータを直接やり取りできない通信経路に送るときは、

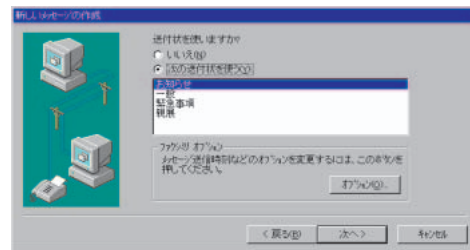
自動的にMIMEエンコーディングでテキストに変換され、受け取る側でも自動的にバイナリに変換される。この変換はユーザーからは見えないし、余計な心配もいらない。

また、「エクステンジ」単体でも、リッチテキストフォーマットを使って文字サイズやボールドやイタリックといった修飾が扱える。純粋なテキストの電子メールを見慣れた目には、これだけでも十分に魅力的だ。

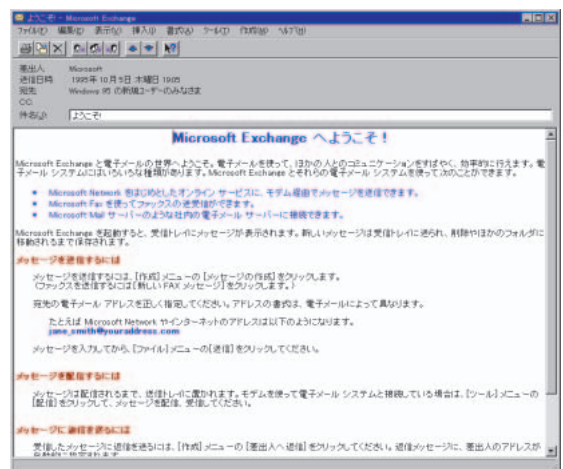
「エクステンジ」のクライアントは、これらの情報の転送や検索のための操作系を電子メールを中心に据えたスタイルでアレンジしたアプリケーションと言うことができる。ユーザーから見ると、情報は『受信トレイ（インボックス）』に入ってきて、送り出すときは相手を指定して送るという、電子メールの操作なので、ネットワークやファイルの共有など、システム構成に影響されるシステムの都合を気にする必要はない。また情報の共有でも、文書ファイルのありかやデータベースサーバーを意識する必要はない。情報の伝達と共有が、シンプルなユーザーインターフェースで実現されるのである。



画面① エクステンジで送信する文書を作成



画面② FAXの送信はウィザードで簡単に設定できる



画面③ エクステンジで電子メールを受け取ったところ



ウィンドウズ95のみどころ (6)

「他のシステムと同様に やっと長いファイル名が使える」

ウィンドウズ95ではアルファベットの大文字と小文字が区別される255文字までの長いファイル名が使える。他の環境の饒舌なファイル名を横目で見ながら堪え忍んできたDOSやウィンドウズユーザーが、やっと長いファイル名が使える日がくる。

ネットワークでつながる他のOSを意識する

ネットワークの有り難みを感じるこの1つに、アーキテクチャの異なるマシンとの間のデータ交換が簡単になるという点がある。容量が1.44Mバイトの、DOSフォーマットの3.5インチフロッピーディスクが共通のメディアとして使えるようにはなったが、ファイル名が長すぎて、名前を変えて扱わなければならないこともある。

もっとも、いまだきファイル名の文字数が少なくて困るようなパソコンはDOSやウィンドウズマシンぐらいだが、ファイル名に8文字、拡張子に3文字しか使えないこの手のパソコンは世の中にたくさんある。マッキントッシュやUNIXのユーザーからみると、ファイル名の長さにこんなに厳しい制約のある環境は、前世紀の遺物以外のなにものでもないだろうが、インターネットに接続されているマシンの中で

最大の派閥を構成していることは間違いない。

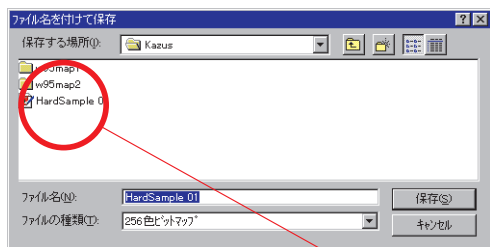
DOSやウィンドウズマシンの間でファイルを取り取りするだけなら、この8文字+3文字の形式の制約は、当たり前なことなので、とくに困ることはない。DOSやウィンドウズのユーザーは、少ない文字数でファイルの内容を表現できるように訓練されているので、俳句や川柳を作るのも上手い(らしい)。『W95LNGFN.TXT』のような短い名前からでも、多くの情報を引き出せる。

しかし、他のOSが動いているマシンとネットワークで繋がると、自分たちがどんなに不自由な暮らしをしているかが見えてくる。多くのFTPサイトでは、DOSやウィンドウズマシンのことを考えて8文字+3文字形式のファイル名にしてくれているけれども(インターネット社会で一番大事なものは思いやりだ)長いファイル名がそのまま見えているサーバーがないわけではない。またUUENCODEされたデータの元のファイル名が8文字+3文字形式に収まるとは限らない。適当に賢いユーティリティなら、この程度の問題は自動的に解決してくれるけれども、だからといって不自由を感じることがないわけではない。

なにしろ、同じマイクロソフトのOSである

ウィンドウズNTでも長いファイル名が使えるぐらいだ。マッキントッシュ、UNIX、ウィンドウズNT...要するに、他のメジャーな環境は、8文字+3文字形式のファイル名を押しつけてはいない。まったく制限がないわけではないが、もっと緩やかで自由度が高い。DOSやウィンドウズにしがみついている人も、いまこそ表現の自由を求めて立ち上がるべきときだ!

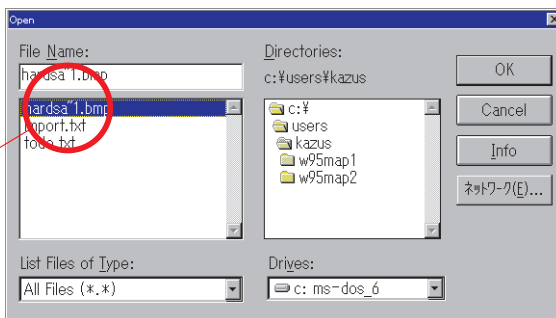
しかし、わざわざ立ち上がらなくても、この悩みはもうすぐ解消される。ウィンドウズ95の新しいファイルシステム(VFAT)は、255文字までの長いファイル名、ディレクトリ名を扱えるのだ!先ほどの『W95LNGFN.TXT』というファイルは、『ウィンドウズ95 Long Filename.Txt』という名前に変えられる。古い16ビットアプリケーションのために、自動的に8文字+3文字形式で重複しない名前が割り当てられる機能も含まれているので、「ファイル名は8文字+3文字」と信じ込んでいるアプリケーションで扱えなくなることもない(多少の不便は感じることになるが、8文字+3文字形式の枠の中で生きるよりはましだ)。anonymous FTPで『NiceGirlOnTheNet.jpeg』というファイルを見つけたとき、名前を短くするのに悩んだり、アプリケーションが勝手に付けた名前がわからなくなって困ったりすることもなくなる。32ビット化やマルチタスクもいっけけれども、インターネット上の他のシステム同様やっとサポートされた長いファイル名は、インターネットユーザーにとっては見逃せないポイントだ。



画面① ウィンドウズ95の新しいファイルシステムは、長いファイル名を扱える

長いファイル名はこのように見える

画面② 長いファイル名を付けると、従来のアプリケーションからは、このように見える





パート2: ウィンドウズ95でアプリケーションと各種サ

パート1では、ウィンドウズ95のスペックを見てきたが、ウィンドウズ95の発売にあわせて開始されるサービスや、発売が予定されているアプリケーションがいくつかある。パート2では、これらの追加アプリケーションとサービスについて紹介することにしよう。



ネットワーク機能を強化する

「マイクロソフトプラス!」

「マイクロソフトプラス!」(以降、「プラス!」と表記)は、ウィンドウズ95のオプションパッケージである。この「プラス!」により、ディスク圧縮やスケジュールによるプログラムの起動などさまざまな機能が追加される。

「マイクロソフトプラス!」とは
この「プラス!」の中に含まれている機能のいくつかは、ウィンドウズ95のバージョンやバージョンでパッケージに入っていたり、

パッケージに入るというアナウンスが一度あったものなどがある。この中には、マイクロソフトのWWWブラウザである「インターネットエクスプローラ」や「エクステンジ」のインターネットメールドライバーなどが含まれている。

「プラス!」は、CD-ROMで供給され、インストールすると、以下のような機能が追加される。

(1) 壁紙やカーソル、サウンドなどをカスタ

- マイズする「デスクトップテーマ」
- (2) 設定した時間にプログラムを起動する「システムエージェント」
- (3) 新しい圧縮ドライブ「ドライブスペース3」
- (4) アンチエイリアス処理などの「ビジュアル拡張機能」
- (5) 「3Dピンボールゲーム」
- (6) 電話回線から接続し、ウィンドウズ95マシンをサーバーとして使用する「ダイアルアップサーバー」
- (7) WWWブラウザやダイアルアップ接続を強化する「インターネットジャンプスターターキット」

英語版の数値だが、インストールには25Mバイト程度のディスク容量が必要である(特に「デスクトップテーマ」が大きい)。それでは、個々の機能を見ていくことにしよう。



画面① デスクトップテーマの1つ、「science」。壁紙やアイコンが変わる



画面② システムエージェントの登録画面

画面③ デスクトップテーマの設定画面。変更後の画面がわかりやすく表示される

変わる ービス

デスクトップテーマ

「デスクトップテーマ」は、壁紙やカーソル、動作に付けるサウンド、スクリーンセーバーなどをカスタマイズするユーティリティである。しかも、これらを一括して指定できるようになっており、さまざまな「テーマ」にそった設定が最初から用意されている。

たとえば「サイエンス」というテーマでは、バックグラウンドで動作していることを示す砂時計付きカーソルは、泡立つピーカーのアニメーションになったり、砂時計カーソルが放電する電球（X Fileのタイトルで出てくるやつね）になったりする（画面①）。このほかにも標準で、14種類の設定が用意されており、それぞれ、サウンドやカーソルのファイルが付属する（このため、結構ディスク容量を食う）。

「デスクトップテーマ」をインストールすると、コントロールパネルにアイコンが追加される。設定用のダイアログボックスは、（画面②）のようなものだ。上記の設定項目も、個別に設定するしないを選べる。

また、自分で設定した組み合わせに名前を付けて保存することも可能である。これを使うと、標準の設定を一部変更しオリジナルの設定を作ることできる。

結構楽しい機能だが、ノート機でモノクロ

LCDとカラーCRTで利用する場合の設定を切り替える、あるいは解像度によって設定を変えるといった場合にも利用できる。

システムエージェント

「システムエージェント」は、定期的に行う作業（たとえばスキャンディスクによるディスクチェックなど）を指定した時間に自動的に行うものである。起動されると、タスクバーのステータス領域にアイコンが表示され、動作中であることを示す。これをダブルクリックすると、登録用のウィンドウが表示される（画面③）。

ウィンドウズでもWinCronなど、設定した時間にプログラムを起動するフリーソフトなどがあつたが、このシステムエージェントは、プログラムの起動に関して、細かい設定が可能だ。

たとえば、指定した時間にほかのプログラムが動作していた時の処理やユーザーがその時使っているかどうか、コンピュータがバッテリーで動作しているかどうかといった条件に応じて、プログラムの起動するしないを決められるのである（画面④）。

ドライブスペース

MS-DOS6.0から圧縮ディスクドライバが付属していたが、この「プラス!」では、その最新版である「ドライブスペース3」が入っている。この「ドライブスペース3」は、最大2Gまでのディスクを圧縮可能で、さらにコンプレッションエージェントにより、コンピュータを使っていないときに圧縮作業を行わせたり、ファイルの使用頻度に応じて圧縮方法

を変えるなどの設定が可能になっている（画面⑤）。

ダイヤルアップサーバー

ウィンドウズ95には、NTのRASサーバーやインターネット接続をするためのダイヤルアップ機能があるが、これはクライアント機能しかなく、ウィンドウズ95マシンはサーバーになることはできなかった。「プラス!」の「ダイヤルアップサーバー」は、このサーバー機能を追加するもので、これにより電話回線などから、ウィンドウズ95マシンにログインし、ファイルアクセスなどが行えるようになった。

その他

このほか、ビジュアル拡張機能やゲームなどがある。

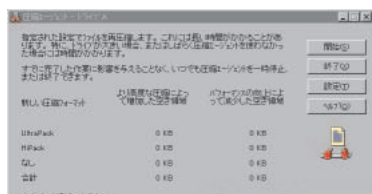
「プラス!」のビジュアル拡張機能をインストールすると、表示に関して以下のような機能が追加される。

- (1) 表示アイコンサイズや表示色の切り替え
- (2) 「マイコンピュータ」や「ごみ箱」などのアイコンの変更
- (3) スクリーンフォントのアンチエイリアス（なめらか）表示
- (4) ウィンドウ内容を表示したままの移動
- (5) 壁紙をスクリーンにあわせて伸縮させる

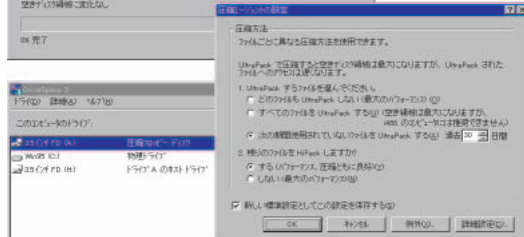
ゲームは、ウィンドウズの高速描画機能を利用したもので、ウィンドウズのゲームとは思えない表示速度である。ただし、この速度もディスプレイドライバーなどに依存するため、



画面① システムエージェントの設定画面。システム自動実行の開始時期を詳細に設定できる



画面⑤ 圧縮エージェントの設定画面。使用頻度に応じて圧縮方法を変えられる



Windows 95用のドライバーが用意されていないと恩恵に与ることはできない。

インターネット機能

本誌の読者には一番気になると思われるのが、この「インターネットジャンプスターキット」だろう。このキットには、以下のような機能が入っている。

- (1) インターネットセットアップウィザード
- (2) インターネットエクスプローラー (WWWブラウザ)
- (3) エクスチェンジ用インターネット電子メールドライバー

また、このキットをインストールすると、アプリケーションからの接続要求に対応して、自動的にダイアルアップを起動させることもできる (Windows 95標準では、接続に先だって手動でダイアルアップ接続を行う必要があった)。

インターネットセットアップウィザード
マイクロソフトのアプリケーションなどでも採用されているウィザード機能とは、設定な

どを順を追って、質問に答える形で行うプログラムである (画面⑥)。設定中はいつでも後戻りができるため、間違いに気づいたら、やり直すことができる。設定にありがちな、間違っただけでプログラムやシステムが起動しなくなるといったトラブルを避けることができる。この「インターネットセットアップウィザード」は、モデムかイーサネットか、接続はMSNかプロバイダ経由かといった設定を行い、MSNによる接続を指定すると、自動的にオンラインサインアップなどの処理まで行う。

インターネットメール

Windows 95に付属する「エクスチェンジ」は、MAPIドライバーを追加することで、さまざまなメッセージシステムからの情報を扱うことができるようになっている。CD-ROM版のWindows 95ではコンピュサーブのドライバーが添付されているが、この「プラス!」にはインターネットの電子メールのドライバーがサポートされている。このドライバーは、受信にPOP3プロトコルを使い、送信にはSMTPを使うようになっているが、設定として、1つのメールサーバーしか指定できない。もちろん、イーサネット経由、ダイアルアップ経由のどちらでも接続が可能だ。

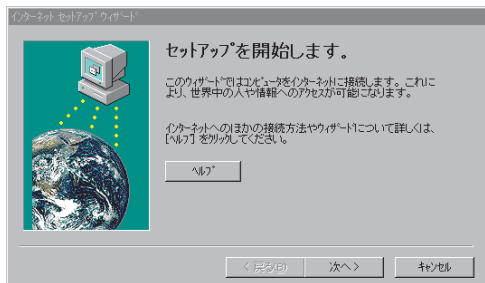
インターネットエクスプローラー

マイクロソフトが米国スパイグラス社と共同開発したWWWブラウザが、「インターネットエクスプローラー」である (画面⑦)。NCSAの「モザイク」というWWWブラウザを基にしたブラウザで、Windows右上のシンボルには、雲をバックにしたWindowsのロゴになっており、データ受信中は、後ろの雲が流れていく。

ブラウザとしては、特に特徴あるものではないが、マイクロソフト製で、多数の人が購入するであろう「プラス!」に含まれているため、結構普及するかもしれない。なお、HTMLの拡張として、バックグラウンドはサポートされているが、表はサポートされていない。またヘルパーアプリケーションとしての「リアルオーディオ」のプレーヤーが付属している。

なお、この「インターネットエクスプローラー」は、すでにバージョン2.0のテストが始まっており、マイクロソフトのWWWサーバーからダウンロードが可能である。

こちらは、標準的な表などに加え、インラインの動画再生や電光掲示板のような流れる文字列などの独自のHTML拡張に対応している。また、カード会社であるVISAと共同開発したセキュリティ機能を持っている (画面⑧)。



画面⑥ インターネットセットアップウィザードのスタート画面。項目を選んで「次へ」を押していく

画面⑧ インターネットエクスプローラー2.0で付くセキュリティ設定画面。これ以外にもネットスケープに追いつく機能が用意される



画面⑦ インターネットエクスプローラーでインプレスのサーバーにアクセスしたところ。ネットスケープでは表示できる表などがサポートされていない





マイクロソフトのオンラインサービス

「マイクロソフトネットワーク (MSN)」

ウィンドウズ95の発売とともにマイクロソフトが開始するのが「マイクロソフトネットワーク (MSN)」である。アクセスのためのソフトは、ウィンドウズ95に添付されており、ユーザーは質問に答えるだけで、オンラインサインアップが可能なこの情報サービスは、他の商用パソコン通信サービスなどからの批判の多いものでもある。また、テスト中にウィンドウズ95にインターネット接続のパッケージが添付されるという話があり、ウィンドウズ95のユーザーがこぞってインターネットへ流れるという予想もあったが、このパッケージは別売パッケージである「プラス!」に入り、ウィンドウズ95には添付されなかった。

いままで、サポートBBSやインターネットでのサービス (WWW やftp など) や、米国のコンピュサーブなどでオンラインによる情報提供を行ってきたマイクロソフトが自前で情

報提供サービスを行うことのインパクトには大きなものがある。

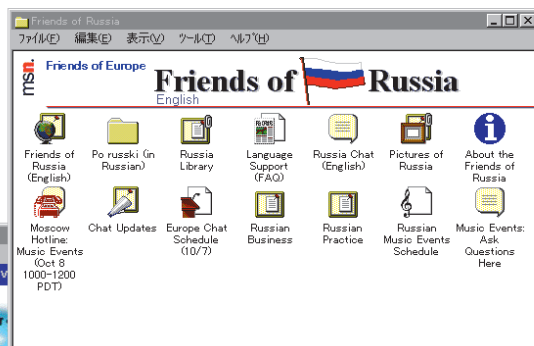
専用ソフトを使うオンラインサービス

MSNは、ウィンドウズ95に付属する専用のアプリケーションを使って、アクセスを行う。このソフトは、ウィンドウズ95の標準のブラウザ (マイコンピュータで起動されるファイルブラウザ) と同じインターフェイスになっており、さまざまな情報があるシステム内の階層化されたメニューは、このインターフェイスを使ってアイコンをクリックすることで選択されるようになる (画面①)。また、システム内の検索なども同一のインターフェイスなので、ウィンドウズ95のユーザーであれば、それほど迷うことはないだろう。

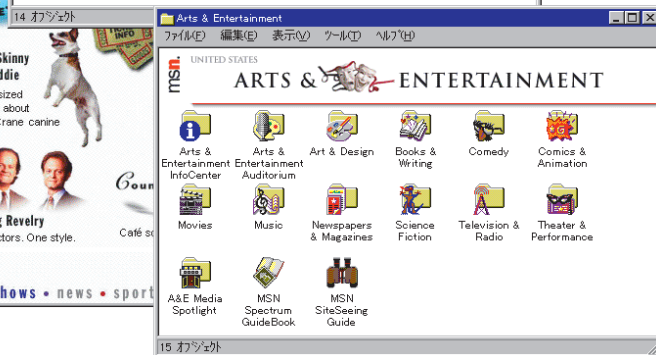
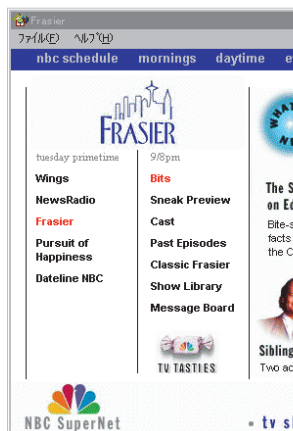
このソフトは、マルチスレッド化されており、複数のメニューを同時にアクセスして、動か

すことが可能で、たとえば、複数のカテゴリの情報ページを同時に表示させたり、ファイルのダウンロード中に、記事を読んだりすることが可能だ (画面②)。もっともモデムを使った転送なので、記事ページを一度送ると、あとは、ローカルマシン内のファイルを読むような形でアクセスしているの、CIMやNiftermなどを使ったアクセスと原理的には変わらない。ただし、マイクロソフトの資料によると、クライアントからのコマンドは、キューイングされ、処理されるとのことなので、完全にコマンドを順次処理するテキストベースのパソコン通信サービスとは効率の点で多少違うかもしれない (コマンドの処理に時間がかかっていると別のコマンドを発行できないため)。

電子メールは、ウィンドウズ95付属の「エクスチェンジ」を利用する。MSNクライアントをインストールすると、「エクスチェンジ」には、そのためのドライバーが組み込まれ、接続時に自動的にメールの受信が行われるようになる。このため、レイアウト情報やバイナリファイルを添付したメールがそのままやりとりできる。



画面① ウィンドウズ95と同じようなアイコンで表示される



画面② ニュース記事を開いたところ

アクセスの実際

デスクトップ上のアイコンを起動すると、ダイアルの画面になる(画面③)。ここで、電話番号やモデムなどの設定を必要なら行い、接続ボタンを押すことで接続が開始される。

接続が完了すると、トップメニュー(画面④)。これはプログラムが出しているため日本語化されていると、『MSN Today』というウィンドウが開く(画面⑤)。これは、トピックスやお知らせなどにアクセスするためのウィンドウ(メニュー)で、WWWのクリックابلマップのようにウィンドウ内のグラフィックをクリックすることで、該当項目へジャンプする。なお、こうしたグラフィックの表示は、画像がだんだんと鮮明になっていく表示方法(GIFのインターレース表示のようなもの)である。

トップメニューの『カテゴリ』がMSNのフォーラムへの入り口で、ここをクリックすると、ウィンドウ95ブラウザのウィンドウが表示される(画面⑥)。もし、頻繁に訪れるようなフォーラムなどがある場合、ウィンドウ内のアイコンをデスクトップなどへドロップしてショートカットを作成することも可能だ。

アプリケーションとの連携

「オフィス95」に含まれる「ワード」や「エクセル」のヘルプメニューには、MSNへのショートカットが登録されており、そこからアプリケーション関連のフォーラムへ直接接続することも可能だ。ヘルプのように頻繁に使ってしまっただけでなく、追加のプログラムや最新情報などがすぐアクセスできるというのもちょっと魅力的である。

また、MSN内に置かれているさまざまなドキュメントを選ぶと、ダウンロードが行われ、該当するアプリケーション(たとえば「ワードパッド」など)が自動的に起動する。これなどは、WWWブラウザのヘルパーアプリケーションのような発想だが、これにより、テキスト以外のさまざまな情報が入手可能になる。

プロバイダー機能も持つ

「インターネットエクスプローラー」がインストールされている場合など、MSN内のリンクからWWWサーバーへリンクすることも可能である。つまり、インターネットプロバイダ



画面③MSNのアイコンをクリックすると、ログインする画面になる

画面④MSNのトップ画面。5つのメニューに分かれている



画面⑤「MSN TODAY」の画面。トピックスやお知らせにアクセスすることができる



画面⑥「カテゴリ」には各種フォーラムが並んでいる



一の機能もMSNは持っているのである。ただし、この機能は現在は米国内でのみ利用可能とのことだ。国内でウィンドウズ95が発売され正式運用となったら、このあたりの機能も追加されるだろう。

日本でのサービス

現在、全国で11か所のアクセスポイントがあるようだが、これではちょっと数が少ない。また、いまのところ、メニューからなにからすべて英語なので、メインの情報源にするには

ちょっと無理があるだろう。アメリカ国内では、月3時間までで年間約40ドルといったプランから、月20時間で毎月約20ドルといったいくつかの料金パターンが設定されているが、電話料金の高い国内では、多少配慮がほしいところだ。

MSNは、システム的にはマイクロソフトが独自に作ったWWWといった感じである。画像のプロGRESS表示（グラフィックをだんだんと表示する）とか、マルチスレッド対応、ヘルパーアプリケーションなど、WWWの特

徴をつかんで、専用システムを作り上げている。また、なんとといっても、OSやアプリケーションの製造元ならではの情報があるところも魅力だろう。

国内でもインターネットのプロバイダー機能を持つならば、月20時間2000円程度はそう高くない料金だろう。アクセスポイントなどが整備されてくると、なんとといってもOSにアクセスソフトがバンドルされている分、有利な展開となるかもしれない。



MSNのみどころ

MSNには大変多くのフォーラムがあり、いくつもの階層に分かれているので、初めて体験する人はどこを見ればよいかわ戸惑ってしまうかもしれない。MSNに接続するとトップメニューのほかに「MSN TODAY」という最新情報も表示される。これを利用して「カテゴリ」からいくつもの階層を経て情報に到達するという面倒なことをせずに、面白そうなトピックをクリックするだけで簡単にアクセスすることが可能だ。

「MSN TODAY」は毎日更新されているが、ほぼ毎回登場するのが「msn news」。オンライン新聞のようなもので、「World」「Business」「Nation」などさまざまな分野に分かれている。記事に関連するMSNのニュースグループやチャットルームなどの紹介もされており、記事で詳しく知りたいことがあるときには、どこで調べることができるかが分かるように配慮されている。

「MSN TODAY」にはほかにも「MSN COMPUTING」や「MSN SPORTS」など、さまざまなメニューがある。「SOHO」という項目もあり、SOHOに役立つサイトやオンラインソフトの最新情報を知ることができる。

「MSN TODAY」を使わずに、階層を選びながら情報を探すには、トップメニューで「カテゴリ」を選ぶ、掲示板やチャット、オンラインショッピング、ファイルのダウンロードなど多彩なサービスが用意されている。

「Gourmet Gift Net」というフォーラムの「Designer's Table」というグループでは、ユニークなバスケットのショッピング案内があった。「Order Form」をクリックすると、フォームがダウンロードされてくるようになっている。

また、前述した「msn news」のほかにオンラインマガジンなども用意されている。米国「PC-MAGAZINE」などが読める。日本の雑誌でもMSN上で読めるものが登場することだろう。

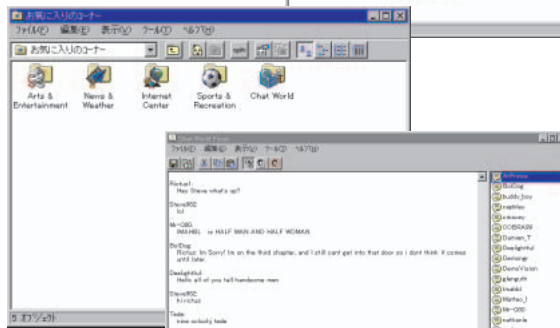
「カテゴリ」で「CHAT WORLD」を選ぶと、チャット関係のアイコンが多数表示される。「Chat World Foyer」を選ぶとチャットウィンドウが表示される。ウィンドウは会話のログ表示、参加者一覧、送信ダイアログの3つに分かれている。発言したいときは送信ダイアログに書き込み、「送信」ボタンを押せばよい。チャット参加者のリストはアイコン表示されており右クリックでプロパティを見ると、その人のプロフィールが表示される。法人名なども分かるようになっていているところは面白い。

「Internet Center」というメニューもある。ここではネットニュースやWWWを利用できる。ネットニュースについてはマナーなどがヘルプに詳しく書かれており、「他の人から思いがけない反応が帰ってきたりするので、注意してください」など注意書きもある。なかなか親切だ。ネットスケープなどの、サードパーティ製のツールもここからダウンロードできるようになっている。

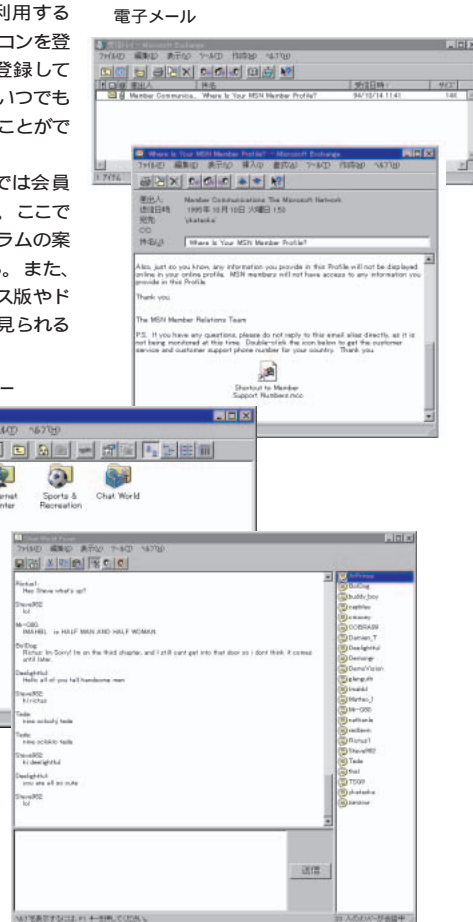
MSNのトップメニューで「電子メール」を選ぶと、エクスチェンジが起動し、メールボックスが表示される。操作方法はLANやインターネットで使うときとまったく同じである。トップメニューの「お気に入りのコーナー」は、MSNでよく利用する場所に移動するためのアイコンを登録しておくフォルダだ。登録しておけばクリックするだけでいつもの場所にアクセスすることができる。

「メンバーアシスタント」では会員への告知情報が表示される。ここではMSNの使い方やフォーラムの案内などを読むことができる。また、「MSN TODAY」のイギリス版やドイツ版など、他国のものを見られるようになっていて面白い。

お気に入りのコーナー



チャットウィンドウ



MSNのインターネット戦略について聞く

マイクロソフト社のインターネット戦略の最前線で活躍するマネージャー、アンソニー・ベイ氏に
MSNの戦略について語ってもらった。



アンソニー・ベイ氏
マイクロソフトコーポレーション
マイクロソフトネットワーク
ジェネラルマネージャー

マイクロソフトネットワーク（MSN）の日本のアクセスポイントはTCP/IPプロトコルによるものではありませんが、これはどういった理由によるのでしょうか？

MSNはX.25プロトコルとTCP/IPプロトコルの2通りの接続方法があります。米国ではTCP/IPによる接続が一部の地域では始まっていますが、日本ではまだ始まっていません。MSNはすべての接続をTCP/IPによって行うことを目指しています。96年の初めくらいを予定していますが、今後TCP/IPによる接続に統一できれば、MSNとインターネットとは統合された環境になります。

MSNは一時TCP/IPを使うことによるセキュリティについて懸念をしていたようですが、現在ではどうお考えですか？

現在ではマイクロソフトとクレジットカード会社のVISAで共同開発したSTTというセキュリティシステムがありますので、ログインする際の認証を暗号化して行うことと、各セッションごとにセキュアモードを意用することで、ネットワーク上のプライバシーは保たれると思います。またネットスケープ社が開発したSSLもサポートしています。

MSNのアクセスポイント以外の他のインターネットサービスプロバイダーからMSNに接続し、その中のコンテンツサービスを受けることもできるのですか？

もちろんです。MSNには2つのソリューションがあります。1つはMSNだけで完全なサービスを利用するもの。そしてもう1つは、他のインターネットサービスプロバイダーを介してMSNにアクセスすることです。ただし、後者は、本来マイクロソフトが狙いとしている

ことではありません。ユーザーはインターネットサービスプロバイダーのアカウントとMSNのアカウントの2つを取得する必要があります。パワーユーザーならそれでも不都合を感じることはないでしょうが、一般人にとってはこのような方法は複雑と感じると思います。ただ、企業内など、インターネットに専用線がつながっている環境からユーザーがMSNを利用することもあるでしょうから、その場合は現在開発中の「MSNプロクシーサーバー」というものを利用してMSNを利用できます。

MSNがオープンすると、現在の個人向けのダイヤルアップIP接続サービスを提供しているインターネットサービスプロバイダーは影響を受けるのではないのでしょうか？

MSNのためにダイヤルアップをサポートを提供するプロバイダーがなくなるなんてことはないでしょう。ただ、MSNではIPアドレスやDNSを設定する必要がありません。「設定が簡単」というのは、他のインターネットサービスプロバイダーにはない魅力ではないかと思います。

MSNのブラウザは他のオペレーティングシステムへの移植の予定はありますか？

来年リリースする予定の新しいウィンドウズNTではMSNが利用できるようになります。その後、マッキントッシュ版を予定しています。残念ながらウィンドウズ3.1、OS/2、UNIX版は予定していません。つまり、MSNはウィンドウズユーザーだけを対象としたものではなく、すべてのコンピュータユーザーを対象としたサービスだというわけです。

MSNの中にコンテンツは簡単に作れるのですか？

「ブラックバード」というオーサリング環境を使うこととなります。このブラックバードというオーサリング環境は、ネットワークにとどまらずCDを使ったマルチメディアシステムなども含めて統一的に番組を制作することができるものです。リリースは来年の予定です。そして「ブラックバードビューアー」というソフトでブラウズします。これは「メディアビュー」や「インターネットエクスプローラー」と同じような機能を持っています。ブラックバードを使えばHTMLよりも簡単にオーサリングすることができるようになるでしょう。さらに「ブラックバードサーバー」を購入することによって、個人による情報発信が可能となります。

ところで、WWWのブラウザとしては「ネットスケープナビゲーター」が事実上の標準となっています。HTMLも独自拡張をして、WWWサーバーもその拡張を使ったページを作っています。こうした拡張機能「インターネットエクスプローラー」はすべてサポートしてはいないので、ネットスケープナビゲーターで見たときよりも見た目でも劣ってしまいます。「インターネットエクスプローラー」は今後どのような製品になっていくのでしょうか？

WWWブラウザの市場はネットスケープ社だけでなく、他社が参入する余地は十分ありますね。「インターネットエクスプローラー」は3か月ごとに新しいバージョンを出す予定です。ですから年末までには新しいバージョンがリリースされることでしょう。マイクロソフトとしては競争力のある製品を作るべく努力しております。表組み機能をはじめとしたHTML3.0のフルサポートも、近い将来に必ず実現します。



ネットワークの強化がポイント

「マイクロソフトオフィス95」

ウィンドウズ95に対応して、マイクロソフトの主力アプリケーションであるワードやエクセル、そしてこれらをセットにした「オフィス」がバージョンアップする。ネットワークなどが強化されたウィンドウズ95に対応して、これらのアプリケーションもネットワーク機能やさまざまな部分が強化されている。ウィンドウズ95対応の「オフィス95」の日本語版が入手できたので、これについてレポートする。

製品の概要

「オフィス95」は、「エクセル」、「ワード」、「パワーポイント」、「スケジュール+」の4つのアプリケーションと、「バインダー」や「ショートカットバー」(後述)などのサポートアプリケーションから構成されている(画面①)。動作するのはウィンドウズ95またはウィンドウズNT3.51以降であり、ウィンドウズ3.1では動作することはできない。

今回のバージョンアップでは、32ビットアプリケーションに作り直されたという点が大きなポイントだろう。ウィンドウズ95の中で動

作する場合、ネイティブの32ビット化したアプリケーションのほうが効率がよく、また、同一アプリケーション内でも並行動作する部分に関しては、スレッド化するといったことも可能になる。

「エクセル」や「ワード」といった各アプリケーションは、いままで個別に作られ、それぞれ別々に発展してきた。たとえば、「エクセル」は、ウィンドウズのバージョン2のときに最初からウィンドウズアプリケーションとして登場したが(もっともその前にマッキントッシュ版があったが……)、「ワード」(という名称のワープロソフト)は、DOS版があり、その後ウィンドウズ版が登場している。

今回のバージョンアップで、「オフィス」の各アプリケーションは、共通のモジュールを使って動作するようになったため、設定などを共有することができるようになった。たとえば、今回「ワード」以外のアプリケーションで利用できるようになったオートコレクト機能も、この共有モジュールで実現されているため、1つのアプリケーションで行った登録が他

のアプリケーションでも有効になる。マイクロソフトの資料によるとプログラムコードの約20%は共有モジュールとなっているということだ。

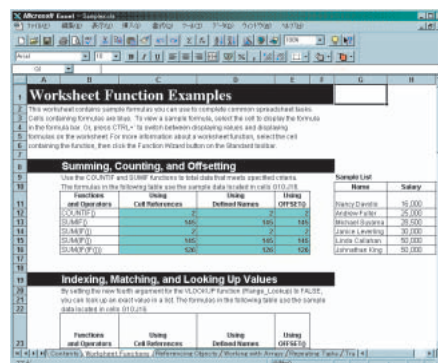
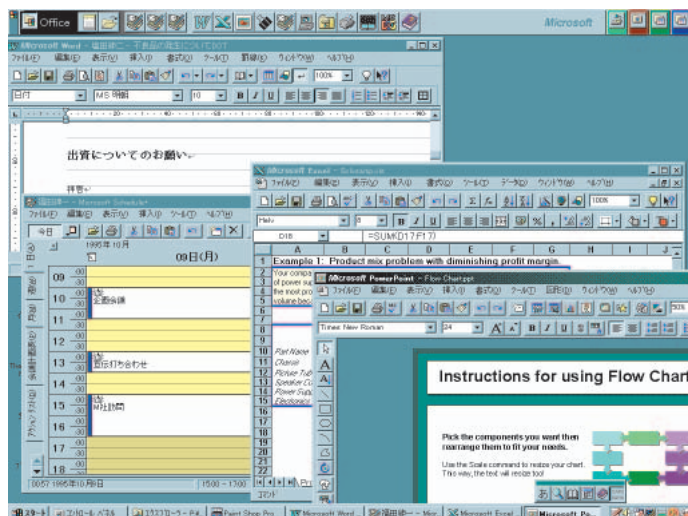
エクセルフォーウィンドウズ95

外観は、いままで「エクセル」とそう変わらないが、タイトルバーの部分にマイクロソフトのロゴが入り、グラディエーションが付いた(画面②)。ヘルプメニューのバージョン情報を見るとバージョンは7.0となっている。

マイクロソフトの資料によると、再計算エンジンの変更や32ビット化などによりさらにパフォーマンスが向上しているということだが、ウィンドウズ3.1と同一ハードウェアでの比較ができなかったため、パフォーマンスの測定も体感速度に関する調査も行うことはできなかった。

印象として、関数などの基本機能よりは、ユーザーインターフェイス面での改良が目立つようだ。たとえば、行や列を挿入する場合、その動作がアニメーション表示されたり、スクロールバーが、表示領域と非表示領域がわかるようにサイズが変わり、ドラッグ中には表示されるセルを表示するなど(画面③)、視覚的にわかりやすくなった。

データ入力の場合でも、マウスの右ボタンで「リストから選択」を選ぶと、上下の入力値を調べて、入力候補を表示する(画面④)、他のアプリケーションと登録データを共有するオートコレクトなどで略号による入力ができ



画面② 外観は、いままでとあまり変わらないエクセル

画面① おなじみのアプリケーションに加え、スケジュール+ など新しいアプリケーションが付いたオフィス95

るなどの機能が強化されている。

ネットワーク機能関連では、「共有ファイル」機能が大きな特徴である。この機能を使うと、1つのファイルを同時に複数ユーザーが変更することが可能になる。編集操作としては、制限がつくものの、複数の人が同時に1つのシートで作業することができる。ネットワーク側としては、ファイル共有ができるだけよい。そのため、大規模なネットワークであっても、ファイルにアクセスすることができればよい。「エクセル」は、セーブ時にファイルを調べ、編集されたセルがすでに他の人に修正されていた場合、ダイアログボックスを出し、変更をどうするかをたずねてくる。

グラフ機能では、データマップという機能が搭載された。この機能は、表データと地図データを結びつけ表示を行う機能だ(画面⑤)。

ワードフォーウィンドウズ95

「ワード」もバージョン7.0になっているが、やはり外観的には大きな変化はない(画面⑥)。

⑥)。

ワードプロセッサアプリケーションとしても、さまざまな機能が追加されているが、本誌読者にとって興味があるのは、やはり電子メールやネットワーク機能との関係だろう。この「ワード」では、電子メールとの連携機能が強化されており、ウィンドウズ95の「エクスチェンジ」のエディタとしてワードを利用できる「ワードメール」という機能がある(画面⑦)。この機能は、「エクスチェンジ」のメール作成、表示のウィンドウを「ワード」(メール用のツールボックスが設定されている)に置き換えるもので、「エクスチェンジ」側の使い方は変わらない。

「ワード」を使うと、通常作成するような文章をそのまま送信することができ、相手と同じく「ワード」を持っていけば、着信メールを開くと「ワード」が立ち上がり、そのまま編集して、利用することなどが可能である。

実際の送信には、RTF(リッチテキストフォーマット)とテキストファイルが送られる。相手が「エクスチェンジ」のみの場合には、

RTFの表示が可能なので、一部の属性(たとえば表の修飾情報)は落ちるものの、レイアウト情報付きのデータを受け取ることができるし、テキストのみのインターネットメールなどでも最低限、文字列だけは受け取ることが可能だ。

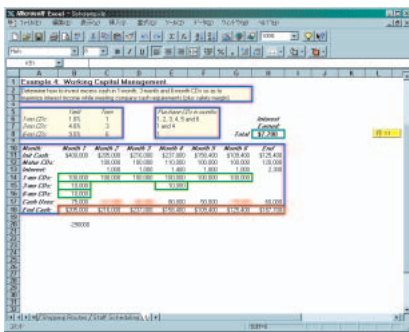
また、オートテキストにsignatureという名前前で文字列を登録しておく、これがメールの最後に署名として挿入される。

「ワード」には、注釈(文書に対してメモを付ける)やラインマーカーの機能が機能があるため、このメール機能を併用して、文書作成や校正を複数で行うことが可能になる。

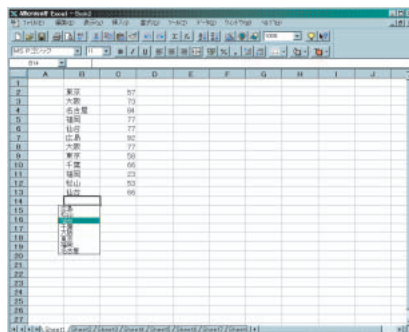
なお、すでに米国では配布されているHTMLの編集などが「ワード」でできるようになる「インターネットアシスタント」の日本語版も近日リリース予定とのことである。

パワーポイント

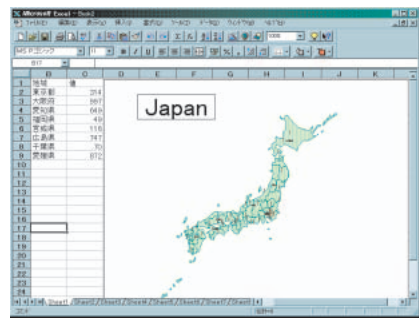
「パワーポイント」は、スライドやOHPなどのプレゼンテーション資料作成ツールである(画面⑧)。背景などがすでに書き込まれたテ



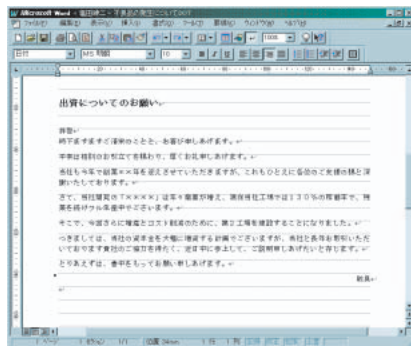
画面⑤ ユーザーインターフェイスが視覚的にわかりやすく改良された



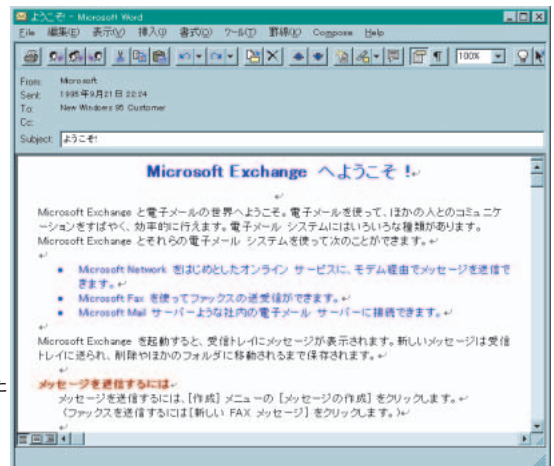
画面④ 右クリックすると上下の入力値を調べて入力候補を表示する



画面⑤ データマップを使うと、表と地図を結びつけることができる



画面⑦ ワードも外観的にはあまり変わらない



画面⑧ 電子メールとの連携機能が強化された

ンプレートが多数付属するので、ユーザーは、そこに文字や絵を書き込んでいくだけでよく、簡単にプレゼンテーション資料が作成できる。

最近では、パソコンそのものを使ったオンラインによるプレゼンテーションをセミナーなどでよく見るようになったが、今回のバージョンアップでは、そのあたりが強化されている。会議メモで、アクションアイテムに会議で決まったすべき事柄を入力すると、プレゼンテーションの最後に自動的にアクションアイテムのスライドが追加されるなどである。

また、ネットワークを使ったオンラインプレゼンテーション会議などが可能だということだが、今回の版では動作させることができなかった。

スケジュール+

「スケジュール+」は、ネットワーク対応のスケジュール管理ソフトで、個人のスケジュールだけでなく、グループのスケジュールを管理することができるものだ(画面⑨)。この「スケジュール+」では、MAPIを使って、会

議の招集などが簡単に行えるようになっている。

「スケジュール+」が理解するグループとは、ポストオフィス(メールアドレスの置かれる場所)に登録されている人(メールボックス)であり、ここには人間だけでなく、会議室やプロジェクトなどのリソースを登録することで、「スケジュール+」によるスケジュール管理が行えるようになる。

「エクステンジ」のポストオフィスを利用するため、「スケジュール+」の動作するマシンから、ポストオフィスディレクトリがアクセスできる必要があるが、逆にRASなどを使って、外部からメールが読める設定ができていなら、「スケジュール+」によるネットワークスケジュール管理がどこからでも利用できる。

バインダーとショートカットバー

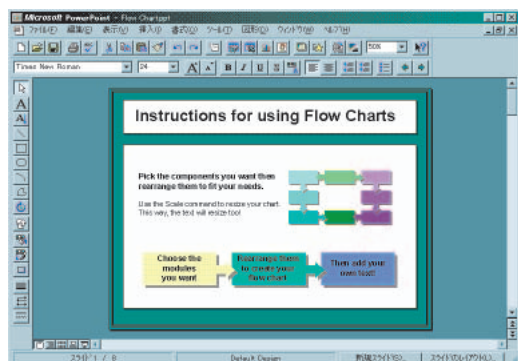
「バインダー」は、「オフィス95」に付属のアプリケーションで作成する複数のデータを、ひとまとめにするアプリケーションである(画

面37)。個々のファイルはセクションと呼ばれ、ウィンドウ左側にアイコンと文書名が表示される。

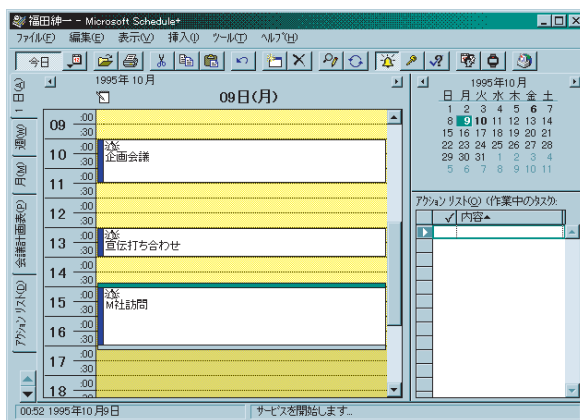
右側部分は、その表示部分だが、この中にセクションのデータを作成したアプリケーションが起動するので、この中で編集などが可能になる。

ショートカットバーは、アプリケーション起動のためのランチャーだ(画面⑩)。バーには、複数のツールバーが登録可能で、用途や分類分けしての登録が可能。バー右および左に並んでいるアイコンがツールバー選択のアイコンで、これをクリックして選択するとアイコンが左端に動き、登録されているアイコンが表示される。

独立したウィンドウでの表示(画面39)や、ウィンドウ95のツールバーのように使わない場合には隠すといった設定が可能のため、解像度の低いディスプレイでもそれほどじゃまにはならない。



画面⑧ プレゼンテーション用ソフトのパワーポイント。簡単に資料作成ができる。



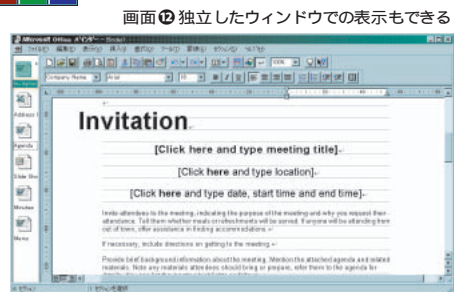
画面⑨ ネットワーク対応のスケジュールソフト。グループのスケジュールも管理する



画面⑩ ショートカットバーには複数のツールバーが登録可能



画面⑪ オフィス95の各アプリケーションで作成したファイルを一括管理するバインダー



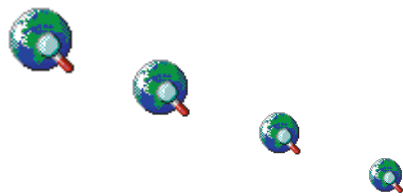
画面⑫ 独立したウィンドウでの表示もできる



Windows95 & Windows3.1

パート3：ウィンドウズ3.1ユ

この特集では、発売直前の最新OS「ウィンドウズ95」のネットワーク機能についてレビューしてきた。ユーザーインターフェイスの変更はユーザーの好みが分かれるところだろうが、ネットワーク機能に関しては、画期的に向上していると評価してよいのではないだろうか？ これをお読みになったインターネットピープルである皆様の評価は？



ウィンドウズ95の未来

「インターネットとパソコンという立場から」

するサーバーの機能さえ持つようになり、TCP/IPも標準でサポートされるようになった。

インターネット接続とウィンドウズ95

TCP/IPが標準でサポートされ、PPPによるプロバイダーへの接続も標準のOSで可能になった。また、電子メールやWWWの利用などもこれで、標準的に行えるようになり、ネットワークアプリケーションの利用やインターネットへの接続が簡単に低コストで行えるようになったといえるだろう。しかも、ネットワーク部分に関しては、いままでのようにサードパーティのソフトではなく、マイクロソフトが保証するソフトウェアを利用するため、OSのサポート範囲に含まれるものなのである。

しかし、TCP/IPのサポートなどは最低限のもので、ftpのプログラムがコマンドプロンプトでしか使えないなどの問題もある（ユーザーのことを考えると、「エクスプローラー」などで対処すべきと思われるのだが……）。

このあたりは、サードパーティのプログラムに期待したいところだが、いまだに16ビットのモジュールが動く内部構造では、さまざまなサービスをネットワークに対して提供するサーバーとしては不安は大きい。

インターネットサービスは可能か

電話料金などの通信環境が改善されれば、いままで単に接続して情報をもらうだけの人でもサービスを提供することが可能になる。しかし、残念ながら、ウィンドウズ95はそのためのOSではない。あのMSNでさえ、サーバーにはNTを使っている。また、単にWWWで情報を提供したいのなら、リーシングサーバーを行っている業者へ頼めばよい。

現時点では、ウィンドウズ95を主に利用す

インターネットマガジンという機種によらない立場の雑誌の中で、ウィンドウズ95を見てきたが、みなさんはどう受け止められただろうか。機能や派手なGUIなど、一見すばらしく変わったように見えるものの、ウィンドウズ95の中には、多数の16ビットコードがあり、いまだにウィンドウズやDOSをまだ引きずっている。しかし、このOSは他のOS以上に多数のパソコンをサポートし、従来ウィンドウズ3.1が動作していたハードウェアでの動作ができなければならない宿命を持っている。OS/2やパソコンUNIXのサポートハードウェアの数に比べたら、ウィンドウズ95が対象とするハードウェア（とその組み合わせ）は、2桁以上違う。それゆえしかたないものなのかもしれない。たしかにこれを実現したマイクロソフトの労力たるや想像を絶するものがあると思われるが、しかし、パソコンのOSを支配すると言われているメーカーとしては「義務」だともいえる。

ネットワークに苦勞したパソコンユーザー

今回のウィンドウズ95最大の強化ポイントはなんといってもネットワーク機能である。パソコンのネットワークと言えば、ネットワークと言われるように、マイクロソフトの製品は、ネットワークOSとしては高く評価されてい

かった。その1つは、パソコンのクライアントソフトに問題があったと筆者は見ている。もし、ウィンドウズで、NTなどのLANマネージャー系のサーバーにアクセスしようとするれば、巨大なクライアントモジュールをDOSで組み込む必要がある。これはメモリーを圧迫し、また、プロトコルを追加することに大きくなっていくもので、英語環境でも負担が大きなものだった。さらにメモリーの苦しい日本語環境では、かなり工夫しないと、LANマネージャーのクライアントをウィンドウズ中で使うことは至難の技であった。

また、ネットワークボードのドライバやウィンドウズ内からTCP/IPを使うためのWinsockなどの標準化が遅れていたことも1つの原因だろう。このため、ネットワークボードには、DOS用にNDIS、ODI、Packet Driverなどのドライバが必要だった。

ウィンドウズ3.0でようやく部分的ではあるが、ようやくネットワークのインターフェイスが用意され、プリンターやドライブのマウント程度は、統一的に動作できるようになったものの、メモリーの問題は何も手がつかない状態であった。

ウィンドウズ95では、こうした問題の解決ばかりか、いまやクライアントマシンがファイルやプリンターの資源をネットワーク内に提供

ユーザーに選択肢はあるか?

るようなクラスのマシンでは、こうしたサービスの提供は不可能ではないものの、「かなり無理がある」、「できない」という段階である。だいたい、サーバーのためのソフトウェアが少なく（NTでさえもまだ少ない）、大量生産を前提としてマージンを大きくとった設計のマシン（大多数のパソコンがそう）では、速度や信頼性の点で大きな問題を抱えているといえる。前述したように互換性維持のために16ビットコードが動作しているような環境で、多数のリクエストを処理するために割り込みなどが多発しては、パフォーマンスの問題もあれば、信頼性という問題もある。

こうした領域は、よくわかっている人向けのUNIXワークステーションなどの活躍する領域といっていよう。同じようなコンピュータではあるが、ちゃんとしたワークステーションとパソコンでは、設計の目的がそもそも違い、コストよりも最大効率と信頼性を追求するような設計が行われているワークステーションのほうがこうした用途にはまだ向いている。パソコンというハードウェアを使うにしても、OSとしては、ウィンドウズ95よりNTやパソ

コン用UNIXなどのほうが向いているだろう。

個人利用ではパソコンだが

個人利用ということに限定すれば、パソコンでいまウィンドウズ3.1を使っている人は、ウィンドウズ95に乗り換えるしか選択の余地がない。「オフィス」などのアプリケーションは、95対応になり、もはや3.1では動作しない。いまのOSのままで、いまのアプリケーションのままというのならともかく、ユーザーはもう、ウィンドウズ95に乗り換えなければならないのである。ほかのOSもないこともないが、目的のはっきりしている場合はともかく、単にアプリケーションを使うといった場合に、ほとんどのアプリケーションはウィンドウズで動作確認が行われ、その上での動作についてはサポートが受けられるものの、互換環境での動作をサポートしているものはまれであることを考えると、ウィンドウズ95以外の選択は考えられない。

こうした状況の中で、ウィンドウズ95について評論的に可否を論じることはかなり無意味なことになる。さまざまなメディアでウィンドウズ95について論じられているが、中には

こうした状況を理解していないと思われるものもある。「ウィンドウズ95の機能には目新しいものはなく、すでにマッキントッシュで実現されていた」式の論調もあるが、だからといって、いままでのものを全部捨てて、マッキントッシュに買い直せばみんな、幸せになれるというのだろうか（マッキントッシュは伝道師がいるくらいだから宗教だという話もあるのでそうなのかもしれないが……）。

ウィンドウズ95では、中途半端ではあるにせよ、かなりインターネットが意識されている。ここは我々とウィンドウズ95を考える1つのポイントである。マイクロソフトといえども、インターネットは無視できないのである（いままでは意識してなかったようだが……）。インテルのペンティアム騒ぎがあれほどまでになった原因は、インターネットによる情報伝達やコミュニケーションが大きいといわれている。

選択の余地がないからといって悲しむことはない（ちょっとおおげさか）。我々は、単にメーカーに電話をかけて文句をいう以上の方法を持っているのである。

<http://www.microsoft.com>



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp